

# 季節風

2016. 8. 6

夏休み特別号

山鹿市立鹿北中学校

文責：郡 一路

## 七十一回目の「原爆の日」

広島（昭和二十年八月六日）・長崎（昭和二十年八月九日）

『あの日、広島と長崎で何があったのか。』

私たちは決して忘れてはならない。』

私は、けがをして逃げる時に、苦いお母さんが死んだ首のない赤ちゃんを背負って泣きながら逃げとおられる姿を見て、たまらなくかわいそうで、ともに泣いた。

広島 当時十六歳女性

被爆距離一・五km

一瞬にして倒壊した家屋の下敷きになって焼死した母の姿が今でも眼底に焼きついていて。私は、家の土台のコンクリートのすき間から上向きに倒れている母を見つけた。「肩のあたりをおさえつけている物をのけてくれ」と言う母の言葉にどうすることもできず、三十分前後で火がまわってきたため、最後の言葉をかわして私はその場を去った。母の後に後髪をひかれる断腸の思いがあった。目鼻の前におおいかぶ

さった建物におさえつけられたままで、じりじり迫ってくる火の手、そして死の瞬間を待つ気持ちといったら、どんなに苦しいことだろう。私は今でも自分の力なさを母を殺したと思っている。それだけに原爆・核兵器が憎い。

広島 当時十六歳男性

被爆距離一・五km

私は、両親を五日目にやっと見つけることができました。もう人間の炭になってどうすることもできまじませんでした。一人とも首はなく、手、足らしい形はありません。書きたいことは山ほどありますが、思い出すとくやしき、腹立たしさが増してきます。毎年来る八月六日、思い出しくありまじ

広島 当時十八歳女性

被爆距離二・〇km

## ＝平和への願い＝

【広島】

『安らかに眠って  
下さい  
過ちは繰り返し  
ませぬから』



原爆ドーム

『ちちをかえせ ははをかえせ

としよりをかえせ こどもをかえせ  
わたしをかえせ わたしにつながる  
にんげんをかえせ  
にんげんの にんげんのよのあるかぎり  
くすねぬへいわを へいわをかえせ』

【長崎】

『のどが乾いてたまり  
ませんでした。  
水にはあぶらのよう  
なものが一面に浮い  
ていました。  
どうしても水が欲し  
くてとうとう油の浮  
いたまま飲みました。』



平和祈念像

長崎の平和祈念像の右手は原爆を、左手は平和を、表情は追悼の意を表わしています。

※広島は今日、長崎は9日『原爆の日』をむかえる。

電車のつり皮にぶらさがったまま黒こげになり、腹巻だけ焼け残った男の人。両手の中から一瞬のうちにわが子を奪われて気が狂い子守り唄をうたっていた母親の姿。全身赤紫色にピカピカになり、幽霊のように「おかあさん」と言いながら両手を前にして、ふらふらと歩いている女子学生、母親は息がないのに、まだ生きたばかりの赤ちゃんが、か細い声で泣いていたこと。眼がとび出し、眼孔が大きく空洞になっていた男の人。思い出せばきりがありません。

広島 当時二十二歳男性

被爆距離一・五km

防空ごうからお母さんが赤ちゃんをおんぶして、三歳くらいの子の手をひきながら出てきたちやうどその時、オレンジ色とカメラのフラッシュのよつな光が頭

上を走ったのです。そして、お母さんと子供が一瞬にしてそこから消えたんです。蒸発したんです。その時私が見たものは煙じゃないんです。水蒸気みたいなものが、そのお母さんと子供からポウーと上がったのを見ました。もうそこには何の姿もありませんでした。

長崎 当時十六歳男性

被爆距離一・〇km

かろうじて実家にたどり着いた妻と子供はすぐ発病し、妻の毛はさわっただけで、そろそろ抜け、歯ぐきは溶け、歯は一本もなく抜け落ち、高熱が続き十九日に子供が、二十日には妻が「さようなら」「さようなら」と言いながら死んだ。妻は二十歳の若さであった。もう絶対に原爆は許してはならない。

長崎 当時三十歳男性

被爆距離一・五km

だれかがやかんで水を配っていました。全身黒こげになり、ただ一ヶ所皮膚が残った手のひらを差し出して長女が「あの水がほしい」と叫びました。私は「私たちがくれるわけないでしょう」としかるほかなかったのです。その時、一人の兵士が水でぬらした泥んこのタオルを持ってきてくれました。娘は、この世で一番おいしいものを飲むように、タオルをしゃぶりながら死んでいきまじ

長崎 当時三十一歳女性

被爆距離一・〇km

私たちの力で核兵器のない世界をつくっていく。そのことをあらためて決意する日が「原爆の日」です。そして、自分に何ができるのかを見つめる日でもあります。奇しくも、今日、八月六日、平和の祭典であるオリンピックが開幕しました。